

フィッツジェラルド文学と大恐慌

内田 勉

F. スコット・フィッツジェラルド (F. Scott Fitzgerald, 以下、フィッツジェラルド) の文学は、アメリカ (米国) の歴史の変動と深く相関することがよく指摘されるが、中でも取り分け両者の強い関係性が認められるのは、第1次世界大戦 (the Great War) と大不況 (the Great Depression) であろう。後者との関係性については、“Family in the Wind” を論じた時に、比喩的に扱ったことはあるが、具体的に論じたことがないので、本論では、アメリカ資本主義にとって、歴史上最大の試練であった大恐慌がフィッツジェラルド文学の中で、どのように描かれるのか、フィッツジェラルドならではの描き方というものがあるのか、その点を考察したい。

大恐慌を扱った作品は、もちろん全て大恐慌後に書かれたが、大恐慌後の作品が全て、大恐慌を扱ったわけではない。しかし、大恐慌を扱っていない作品でも、大恐慌の影響が全くない、というわけでは必ずしもない。1931年6月に書かれた“Emotional Bankruptcy”は、物語の内容は大恐慌よりずっと前の時代にされており、大恐慌とは何の関係もないストーリーだが、タイトルに破産という言葉を使った時、フィッツジェラルドはフランスに滞在していたとはいえ、大恐慌下にあるアメリカを意識する作家の気持ちさが反映していないと言うことは難しいだろう。従って、大恐慌を扱った作品と言う場合、明確に定義しておく必要があると思われる。本論

で考察する大恐慌を扱ったフィッツジェラルド作品とは、大恐慌への言及があり、大恐慌の影響が作品内容と本質的に関係しているものとする。従って、“Emotional Bankruptcy”のような作品は含まれない。*Tender Is the Night* を含むかどうかは判断が難しい。この novel 内の時間は1929年7月、つまり大恐慌前で終わる Everyman 版の *Brucoli* の説と、1930年7月で終わる Cambridge 版の *West* の説が真っ向から対立しているからである。本論ではどちらが正しいかの判断はせず、従って、本論ではフィッツジェラルドの novel は扱わず（他の novel はいずれも大恐慌とは関係がない）、上記の定義に合致するストーリーのみを扱う。明らかに大恐慌の影響が認められる“The Crack-Up”等のエッセイも本論では扱わない。

大恐慌の開始はよく知られているが、1929年10月24日（暗黒の木曜日 Black Thursday）に始まるウォール街の株価大暴落を契機に、1920年代の右肩上がりの好景気は一気に反転し、その後、不況は増々深刻の度を深め、世界的大不況に拡大した20世紀最大の経済変動である。未曾有の景気不振を共和党政権は解決出来ないことを知ったアメリカ国民は、12年ぶりに民主党政権を選び、Franklin Roosevelt 大統領（以下、ローズベルト）に国の舵取りを委ねた。ローズベルトは大統領選挙の時、二つの公約を掲げた。禁酒法の廃止と New Deal 政策による景気回復。どちらの公約もローズベルトの大統領選出に大きな役割を果たしたと言われているが、特に前者は、膨大な酒税を国庫にもたらし、景気回復政策の資金源となり、一定のプラス経済効果があったと言われている。他方、New Deal は名称は有名だが、また、ローズベルト政権が政策の実現に、反対する連邦最高裁に人事干渉してまで、懸命に取り組んだことは間違いないが、どの程度の経済効果があったかは議論が分かれている。一つ確かなのは、米国の景気回復が確実に認められるのは、日米戦争の開始と同時に、米国が第二次世界大戦に参戦して以降であり、景気回復は、どの位 New Deal 政策によるのか、どの位軍需景気によるのか、私を知る限り、明確な結論は出ていないと思われる。

大恐慌の始まった当時、フィッツジェラルドはフランスに滞在していた。1929年3月、デラウェア州ウィルミントン郊外にある邸宅“Ellerslie”の賃貸契約期限が切れるとフィッツジェラルド夫妻はすぐにヨーロッパに旅立った。夫妻にとって、4度目、そして、2年9カ月にわたる最長の、最後の渡欧になる。フィッツジェラルドは株価大暴落の第一報を、恐らくパリで、新聞もしくは知人からの話で知ったと思われるが、投機を一切しなかったフィッツジェラルドには直接の損失は皆無であった。¹⁾ 当時、*The Saturday Evening Post* を始めとするアメリカの大衆雑誌に story を売ることがをほぼ唯一の生活手段にしていたフィッツジェラルドにとって、米国の経済危機に無関心でいられる筈はあり得ないが、大恐慌の開始期にフィッツジェラルドが深刻に憂いていたという資料を見つけるのは難しい。実はこの時期、フィッツジェラルドは、この年3月にヘミングウェイとキャラハン（カナダの作家）のボクシング試合の計時係を務めた時、ヘミングウェイに不利をもたらす計時ミスをして、ヘミングウェイとの軋轢を深め、それが、事実と異なる形で雑誌メディアに公表されたことを一番気に病んでいた。このテーマに関しては既に論述公表したので、これ以上書かない。²⁾

フィッツジェラルドが大不況の最初期に深刻に受け止めなかった理由は、以上だけではない。フィッツジェラルド夫妻の伝記的事実を語る時、恐らく最も有名な出来事であろうが、暗黒の木曜日から丁度半年目に当たる1930年4月23日（水曜日）、ゼルダが発狂し、パリ郊外 Malmaison Clinic に入院する。「ゼルダが大変なことになって入院し、自分は苦悩と不安に打ちのめされている。」³⁾ ゼルダの精神的疾患は今日では統合失調

1) Matthew J. Bruccoli, *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*, 286.

2) “Fitzgerald and Hemingway,” *The Annual Collection of Essays and Studies*, 49 (2002), 77-105.

3) Harold Ober 宛て Fitzgerald 書簡。日付なし。1930年11月11日受取。As Ever, Scott Fitz-, 165. 日本語への訳出は引用者による。以下、原文の日本語訳は全て引用者による。

症とされているが、その後のゼルダの異常な言動の数々を知れば、統合失調症という病名ではとても納得できるものではなく、狂人という名称の方が伝記的事実には合っている。今敢えて、発狂という言葉を使った所以である。フィッツジェラルドは最高級を求める人間だった。自分が入学した大学も最高級だったし、自分の小説を出版するために選んだのもスクリブナー社だった。妻ゼルダにも最高級の治療を受けさせるために、スイスの Val-Mont Clinic に続き、同じスイスの Prangins clinic に入院させ、そこでは、当時、精神分裂症の世界的権威であった Paul Eugen Bleuler 博士（精神分裂症は博士の命名による）の往診も受けさせている。高額の治療費に加え、パリに残る娘 Scottie の教育費（世話担当とは別に家庭教師がついていた）、パリ・スイスを頻繁に往還するフィッツジェラルドの旅費、滞在費。ドルレートがよかったとはいえ、金はいくらあっても足りなかった。フィッツジェラルドは story を増産する。1929年に初めて3万ドルを超えたフィッツジェラルドの年収は、30年にはさらに増え、31年に3万7千6百ドルと、晩年、ハリウッドで MGM に雇用された期間を別にすれば、生涯最大の年収を得る。パリとスイスに分離された家族が経済的に崩壊する危機に際し、フィッツジェラルドは唯一の生計手段であるストーリー創作に全力を注いだ。家族最大の経済的危機を筆一本で乗り越えた。プロ作家としての面目躍如である。しかし、これは人間フィッツジェラルドに対して私が受けた感銘を表白したに過ぎない。フィッツジェラルド自身はむしろ、作家として挫折感を深めていただろう。

歴史に耐え得る novel、*The Great Gatsby* 以上の novel を書かねばという強い志を持って、4作目の novel を書き始めて既に6年。最初の数章を書き上げただけで、あとは罫が明かない。プロ作家としての意識が高いだけに、ストーリー創作による高収入を達成する一方で、フィッツジェラルドには強い焦りがあった。この時期、彼の最大のライバルと目していたヘミングウェイが、1929年9月に *A Farewell to Arms* を出版し、売り上げ数においても、批評家たちの評価の高さにおいても、成功を一手に収

めていた。フィッツジェラルドのエージェントであったハロルド・オウバーも「最近出版された本の中で抜群」と絶賛した。⁴⁾ オウバーは意図していなかったとはいえ、フィッツジェラルドにはこたえたであろう。作家の力は novel で決まる。フィッツジェラルドもヘミングウェイも、どの小説家もどの批評家もそう考えていた。story を書きまくり、稼ぎまくっているフィッツジェラルドの novel はどうしたのか。フィッツジェラルドはこの時期、出来れば、4 作目の novel 執筆にこそ時間を使いたかった筈である。昇る太陽ヘミングウェイ、沈む月フィッツジェラルド。このような比喩が実際に使われたかどうか知らないが、あってもおかしくないイメージである。いや、実を言えば、と言うことは、苛酷なことを言えばということだが、ストーリー創作によるフィッツジェラルドの収入が最高額に達した 1930 年、31 年の時点では、フィッツジェラルドはヘミングウェイと比較されることすらなかった。批評家にも一般読者にも、フィッツジェラルドは novelist として既に死んでいた。The Saturday Evening Post にストーリーを書きまくる売文家 (potboiler) というのが、フィッツジェラルドの通り相場であった。筆一本で家族に対する責任を果たさねばという矜持と、作家としての矜持は、フィッツジェラルドの中で激しく分裂し、葛藤していた。

大恐慌以降、アメリカの大衆雑誌は、広告費が激減した上、購買者数も減少し、大きな経営的打撃を受けたと言われている。この時期に、フィッツジェラルドの作品を乗せた雑誌メディアは主として The Saturday Evening Post (以下、ポスト誌) であったが、フィッツジェラルドの story 一作当たりの価格は大恐慌直前に 3500 ドルから 4000 ドルと大幅に上がり (作品は “At Your Age”)、1930 年・31 年は一作 4000 ドルが維持され、1932 年に至って 3500 ドルに戻り (作品は “Family in the Wind”)、その後、漸減していく。⁵⁾ フィッツジェラルドの責任感と努力も凄まじか

4) October 23, 1929. Fitzgerald 宛て Ober 書簡。As Ever, Scott Fitz-, 154.

5) 利益が大幅に縮小したはずのポスト誌が大不況期の 2 年間、なぜフィッツジェラルドに最

ったが、（死力を振り絞ったという感じがする）、この時期におけるポスト誌の大盤振る舞いがあればこそ、フィッツジェラルドは生計を維持できた。

この時期、大恐慌を背景としたフィッツジェラルド作品は10作くらいになるだろうが、大恐慌そのものが作品内容と深く関わるものは、それほど多くない。フィッツジェラルドのストーリーの中で、大恐慌との関わりが初めて書かれるのは、1930年5月に書かれた“The Bridal Party”（*The Saturday Evening Post*, 9 August 1930）であり、主人公 Michael Curly のかつての恋人であった Caroline Dandy の結婚相手 Hamilton Rutherford が結婚式寸前に、株価大暴落でほぼ全財産を失うエピソードが織り込まれている。しかしこの作品では、物語を展開させる一つの小道具として株の暴落が使われているだけで、大恐慌がもたらす深刻な影響を描く作品では全くない。作品舞台も終始パリである。

大恐慌当時フランスにいたフィッツジェラルドは、妻ゼルダの退院後すぐに帰国の途に就くが、一家で米国行きの船に乗ったのは1931年9月19日である。⁶⁾しかし、フィッツジェラルド自身は、父親の葬儀に参列するため、同年1月に一時帰国している。大恐慌下のアメリカの実相をフィッツジェラルドが自分自身の目で見た最初である。フィッツジェラルドはこのあと再びヨーロッパに戻ったのち、フランスもしくはスイスで、6月に、“Between Three and Four”を、7月に、“A Change of Class”を立て続けに執筆する。フィッツジェラルドが書いた10作以上にわたる大恐慌関連のストーリーの中で、この2作のみが、大恐慌という未曾有の問題に本格的に取り組んだ作品である。この年1月に初めて目撃した大恐慌の光景が作家に深い衝撃を与えたことが影響したと考えられる。勿論、フィッツジェラルド全てのストーリーの中でベストと言われる“Babylon Revisited”（*Saturday Evening Post*, 21 February 1931）は、大恐慌における株価大暴落で全てを失った男の物語で、前者2作よりも早く、1930

高額を払い続けたのか、理由は今の私には分からない。今後の課題である。

6) Bruccoli, *Some Sort of Epic Grandeur*, 313.

年12月に執筆されている。が、この作品の主人公 Charlie Wales の不幸の本当の原因は、自身の遊蕩・放逸のために妻を失い、娘の親権を失ったことであり、大不況自体の影響は二次的である。大恐慌の影響に関わる問題に焦点があるのではなく、当時フランスにいた作家自身の自伝的事実に依拠しながら、大恐慌を背景に借りて、負の過去から再起しようとしながらも過去の引力から逃れられない人間の苦悩を描くことが中心にある。この作品も“The Bridal Party”同様、舞台はアメリカではなく、パリである。

フィッツジェラルドが1929年3月に渡欧して以降、まだ滞欧期間中であつた1931年6月に、ニューヨークを舞台として大恐慌に本格的に取り組んだストーリー“Between Three and Four”を執筆するまでに、彼は17作品を発表しているが、作家自身による自作目録 *Ledger* を参考にと、この間に書いた作品には非常にはっきりした傾向のあることが分かる。1929年では、ニューヨークからフランスに向かう客船が嵐に巻き込まれるストーリー“The Rough Crossing”以下、7作を発表したが、“At Your Age”とシカゴ郊外に住む Josephine Perry を主人公とするシリーズ物第1作である“First Blood”を別にすれば、5作ともアメリカは主たる舞台ではない。1930年には7作品を発表したが、Josephine Perry シリーズの3作品を別にすれば、4作品とも全てヨーロッパが舞台である。1931年には“Between Three and Four”の前に4作品を発表しているが、Josephine シリーズ最終作になる“Emotional Bankruptcy”を別にすれば、3作品とも全てヨーロッパが舞台である。アメリカを舞台とする物語は、Josephine シリーズを別にして、この滞欧期間中、フィッツジェラルドの頭の中にはほぼなかったと言ってよい。1924年4月から1926年12月まで、フィッツジェラルドは2年8カ月連続して、主としてフランスに滞在したが、その期間の執筆においてはこのような傾向はなかった。作品舞台がほぼヨーロッパに限られるという、非常に際立った特徴はフィッツジェラルド最後の滞欧期間だけに見られるものである。大恐慌に対する意識は、

フィッツジェラルドにおいて、1931年1月に一時帰国した際、アメリカ社会の変化を初めて目撃するまでは薄かったと言わざるを得ない。しかも、この時に、アメリカの現実を実際に見たからといって、すぐに、大恐慌下のアメリカを舞台とする作品に取り掛かったのではない。既に2年間以上、ヨーロッパに住み続けるフィッツジェラルドの創作テーマをヨーロッパからアメリカへと180度転換させるには、もう一つの強力な契機が必要であった。

フィッツジェラルドのストーリーを読むのは大恐慌下で苦しむアメリカの大衆である。一作4000ドルという最高額を払い続けたポスト誌も、遂に業を煮やした。彼のエージェントであるオウバーに、アメリカをテーマとしたストーリー（American stories）を書くようにフィッツジェラルドに伝えるよう強く要請した。ポスト誌からオウバーへの要請は電話や口頭で行われたのかもしれないが、文書資料は私の知る限り存在しない。しかし、この要請が非常に強硬なものであったことは、オウバーが二度にわたって手紙で、ポスト誌からの勧告をほぼ同じ文言でフィッツジェラルドに伝えていることから推し量れる。1931年5月19日付と6月11日付の書簡である。⁷⁾特に前者で、最近の3作品についてポスト誌は、ベストとはとても言えない、アメリカを舞台にした作品を書いたらどうかと勧めているとオウバーは述べ、“the Post have definitely asked me to tell you how they feel” (*As Ever, Scott Fitz-*, 176) とフィッツジェラルドに伝えている。オウバーは更にこの手紙の中で、「最近の3作品」とは、“Flight and Pursuit”, “A New Leaf”, “Indecision” と明記している。⁸⁾更にまた、同じ手紙の中で、“On Your Own”についても触れ、原稿の受領と、原稿が改善したことも述べている。この作品は、この段階では“Home to

7) *As Ever, Scott Fitz-*, 176-177; 177-178.

8) “Indecision”は受けを狙っただけの potboiler と言われても仕方がないかもしれないが、“Flight and Pursuit”と“A New Leaf”については、当時のポスト誌の評価より、今日の評価は高いと思う。両作品とも、implausibleな点はあるが、potboilerではない。

Maryland”というタイトルが付されていて、前記した、この年1月にフィッツジェラルドが父の葬儀に参列するため、米国メリーランド州に一時期帰国した経験を基に、人間の自立についての考察をテーマとした好作品である。作家が初めて目撃した大不況についての記述はない。この作品はポスト誌を含め、オウバーが交渉した七つの雑誌全てから拒否され、結局、売れなかった。⁹⁾ フィッツジェラルドがプロ作家となって以来、初めてのことである。作家にとってショックでなかった筈はない。しかし、フィッツジェラルドがこのことを全て知るのは5年後のことである。1931年6月の時点で作品テーマが転換する要因ではあり得なかった。けれども、ポスト誌から警告を受けた後、実際に作品を拒否されたことはテーマの転換に確実に影響したはずである。このようないくつかの事情に促されて、まだフランスにいたフィッツジェラルドは1931年6月、作品の舞台をヨーロッパからアメリカに転換し、大恐慌下の社会と、その中でもがき苦しむアメリカ人に焦点を当てたストーリーに本格的に取り組む。それが“Between Three and Four”である。この二ヶ月前に執筆され、ヨーロッパを舞台とした“Flight and Pursuit”とは、作風がガラリ一变した。

大恐慌下のニューヨークでは、財産を失ったアメリカ人が高層ビルから飛び降り自殺するケースが後を絶たなかった、というのは、近年では神話とされているが、そうであるとしてもそのような神話を生じさせる飛び降り自殺があったことは間違いない。“Between Three and Four”は、この

9) 雑誌に掲載されたのは作家の死後、39年を経てからであった。“On Your Own” *Esquire* 91 (January 30, 1979), 56-67. また、この作品を収めた Brucoli 編 Fitzgerald 短編集 *The Price Was High* の出版日は、何と、1979年1月22日。わずかに8日早い。このわずかな差をつけて、初出を主張する (*The Price Was High*, 323) のが、いかにも Brucoliらしいと思った。これは悪口ではない。学者の矜持に対する私の感想である。1979年当時、フィッツジェラルドの著作権は有効で、彼の一人娘 Scottie が著作権を持っていた。その代行者が Brucoli であった。*Esquire* に掲載された“On Your Own”には Prologue と Epilogue が付いており、後者の最後に筆者名 Brucoli と記されている。前者には、*The Price Was High* に収載された“On Your Own”が初出であり、*Esquire* への掲載は雑誌における初出 (published here for the first time in any magazine) と記されている。*The Price Was High* が本当の初出であることを *Esquire* 掲載版においても強調したのである。Prologue も Brucoli が書いたと考えるべきである。

飛び降り自殺を扱った作品で、かつて解雇した女性が再就職を求めてオフィスに来た時、要請に応じなかった Howard Butler は、彼女が悲観して飛び降り自殺したと思ひ込み、良心の呵責に耐えかねて、遂には自ら飛び降り自殺するという、フィッツジェラルド全作品の中でも、最も暗いストーリーである。大不況当時の大衆雑誌は、作家たちに、大不況を扱いつつも、ハッピーエンドになるストーリーを求め、実際、「大不況をテーマとしたストーリーは全てハッピーエンドになる」ということである。¹⁰⁾ Brucoli の説明が正しければ、“Between Three and Four” は唯一の例外である。確かに大不況を扱ったフィッツジェラルドの他のストーリーは全てハッピーエンド、もしくはそれに近い。¹¹⁾ フィッツジェラルドが大恐慌後に書いたもので、大恐慌を扱わないストーリーには“Two Wrongs”（執筆 1929 年 10-11 月）や“One Trip Abroad”（執筆 1930 年 8 月）等、ハッピーエンドと凡そほど遠い作品がいくらかでもあることに比べると、これは非常に特異である。Brucoli の説明は 100 パーセントの正確さはないにしても、一定の説得力があることは間違いない。フィッツジェラルドが大不況を扱おう作品を書くといっても、彼は初めから、枷をはめられたうえで、書かざるを得なかったのである。¹²⁾

大恐慌下のニューヨークの状況について、主人公 Butler の目を通して、最も具体的に描写しているのも“Between Three and Four”である。失業・自殺といった大恐慌下の深刻な社会問題に初めて取り組んだストーリーであるが、フィッツジェラルドはこの作品においてこれらの問題に最も

10) Ed. Matthew J, Brucoli, *The Price Was High*, 339. 引用訳の原文は“all of these Depression stories have happy endings”. Brucoli のこの説明に対し、Michael K. Glenday は、“Fitzgerald and the Great Depression” (*F. Scott Fitzgerald in Context*, ed. Mangum, 2013, p. 386) において、“Between Three and Four” に関しては、非常に的外れ (very wide of the mark) と述べている。

11) 但し、“The Lost Decade” (執筆 1939 年) のみは終わり方は両義的。と言うよりも、どういう終わり方にするか、関心を示さない作品である。

12) 後述する“A Change of Class”はハッピーエンドである。ポスト誌が掲載したことに不思議はない。同誌がなぜ、“Between Three and Four”を掲載したのかは、今の私には説明できない。

肉薄出来た。とは言え、フィッツジェラルドならではの描き方である。法人向け家具会社の支社マネージャーである Butler は、大不況下のビジネス縮小故に、人員整理の任を担うが、真っ先に解雇したのは、30年前の昔に彼の求婚を拒否した Mrs. Summer (Sarah Belknap, やもめでプリンストン大生の息子がいる。以下 Sarah) であった。報われない愛に対し、復讐という形で恨みを晴らすのは、フィッツジェラルド作品では珍しいが、憎しみを抱えながらも30年間、同じ女性を想い続けるというのは、過去への執着に囚われた人間を繰り返し描いたフィッツジェラルド文学には親和する。Butler が解雇した6カ月後に、生活に行き詰った Sarah は再就職のため、Butler のオフィスを訪れる。この後、彼は Sarah を極めて残酷に扱う。再就職の約束をするでもなく、拒否するでもなく、3時と4時の間に再訪するようと言うだけで、望み亡き望みを持たせて、彼女の心をいたぶるのである。報われない愛を30年間持ち続けた独身男の冷酷さをフィッツジェラルドは余りなく描いているが、Butler という異常人格を描いているのではない。ある条件下で生きざるを得なかった人間の真実を冷徹に描くことこそ、フィッツジェラルド文学の真骨頂である。この特徴は、大恐慌後に初めて出てきたものではない。*The Great Gatsby* における Daisy が Myrtle を轢いた時、Daisy はブレーキをかけるのではなく、アクセルを踏んだ。逃げることしか頭になかったのだ。Daisy は Gatsby が殺された後、彼が轢殺犯にされたことで、彼に濡れ衣を着せたまま、自分の犯行を隠す人生を選んだ。Daisy が悪人だからではない。Daisy の立場にあれば、人間はそうするしかないのである。その不可避性こそがフィッツジェラルドの描く人間の真実である。¹³⁾ それを説得力を持って描き切った時にフィッツジェラルドの作品は傑作になる。

13) Gatsby が Daisy の犯罪を背負った時、引き替えに彼が失ったものは何だったろうか。Gatsby のその後の人生全てだったと思う。自分の人生を失えば、Daisy も失うわけだが、自分の人生を捨てること（命を捨てることではない）だけが、Daisy を生かす唯一の方法であると直感した時、どちらを選ぶか、Gatsby には一瞬の躊躇もなかった。

“Between Three and Four”はどうだろうか。傑作とは言えないが、佳作である。ButlerはSarahに対し、冷酷な復讐をした結果、深い罪責感に襲われ、Sarahが9階から飛び降り自殺したという妄想に囚われる。妄想か現実かを彼なりに、「合理的に」テストするが、飛び降り自殺したという結論しかなかった。しかし、翌日、再び会社に訪ねてきたSarahを控室で垣間見て、幽霊を見たと思えるようになる。彼が唯一信じていた合理観念が崩壊した。もはや恐怖に耐えきれず、自分の9階のオフィスから飛び降り自殺した。

しかし、この話の流れだけでは、この作品は佳作にすらならない。なるほどButlerが妄想を妄想でなく事実であると判断していくプロセスにはそれなりの工夫がある。例えば、飛び降り自殺の新聞記事をアパートの黒人掃除婦に読ませるくだりである。Butlerの言うことが新聞に書いてあるかどうか（Does it say, ‘Mrs. John Summer’?）をこの掃除婦に読ませて、Sarahの自殺が事実であることを確認したのだが、彼自身が自殺する直前に、どこかに判断の誤りがあったことを知り、窓からとびおりた直後に、黒人掃除婦は文盲でButlerの言ったことを鸚鵡返しに答えたに過ぎないことに感づくのである。¹⁴⁾ このエピソードはimplausibleではないまでも、predictableと言わざるを得ない。¹⁵⁾

14) テキストは「たとえ感づいたとしても」の意で、仮定法になっている。

15) フィッツジェラルドのストーリーは、ほぼすべてが面白い。その理由は複数あるが、その一つはプロットのうまさである。しかし、ほぼすべてのプロットにimplausibleと言わざるを得ない要素があり、predictableと言わなければならない要素がしばしばある。フィッツジェラルドのほぼ全てのストーリーを改めて読み直して、そのことを今回またしても強く感じた。フィッツジェラルドのストーリーの中でベストと言われる“Babylon Revisited”においても、Charlie Walesが作品の冒頭で、彼の義兄夫妻Petersの住所をDuncan Schaefferに教えるよう、リッツのバーテンダーに頼んだのに、Duncanに路上で偶然会った時には、関わりを持ちたくなくて、自分のホテルの名を告げるのを避けたのは矛盾である。しかし、この矛盾がなければ、酔っぱらったDuncan達があとでPetersの家に押しかけ、折角成立寸前まで行った娘Honoriaの養育権引き渡しの件が駄目になり、全てがぶち壊しになるというプロットが成立しないのである。人間は内に矛盾を含む存在だから、Charlieの言動が矛盾していたとしても、プロット上の矛盾とは言えない、と考える読み方はあるだろう。私も出来るだけ、説明可能ならば、プロット上における矛盾をないことにしたいと思っているほうである。久しぶりのリッツのバーでは、Charlieはなつかしくて、ついうっかり、Duncanが来

しかし、この作品を私が佳作と評価するのは、Butler が飛び降り自殺に追い詰められるまでに、妄想や幽霊という彼の主観が生んだ要因とは別に、客観的な原因が織り込まれ、その原因に Butler が最終的に気づき、絶望感を一層深めて、最後に死へのダイビングをする書き方に、Butler の絶望の深さを伝える力があって、一見超自然的な趣のある、この作品のリアリズムに納得したからである。Butler は “introverted man” (*The Price Was High*, 339) と紹介されるが、支社マネージャーとしての地位に自分の能力が足りないという自覚を持ち、大不況で解雇が続き、失業者のあふれる中、自分に取って代わる人間はいくらでもいるという不安を抱えていた。夜は睡眠薬が必要であった。Butler が自殺する当日の午前に、出張から帰った社長 Eddington から留守中の報告を求められ、社長不在中に重要な経営判断を社長の了承なしにしたことで叱責された。社長のその次の言葉は、Butler にとってもっと深刻であった。“And Mrs. Summer’s left....Oh, by the way, I want to speak to you about that later” (*The Price Was High*, 349). Butler には社長のこの言葉はすぐに

たら義兄夫婦の住所を伝えてくれと、バーテンダーに頼んでしまったが、実際に Duncan に会った時には、娘 Honoria も一緒だったし、昔の飲み仲間とまた関わり合いになるのは避けた方が賢明と思って、聞かれたホテルの名を言わなかった、という説明は有り得るかもしれない。Duncan 達が押しかけて来た時、“Charlie was astounded, unable to understand how they ferreted out the Peters’s address” (*Taps at Reveille*. Ed. James L. W. West III. Cambridge, 2013, p. 174) と書いているのは、フィッツジェラルドはこの矛盾の本質に気づいていると考えるべきなのか。私はフィッツジェラルド作品のプロット上の矛盾（もしくは implausibility）については、数十年来関心を持っていて、*The Great Gatsby* を初めて読んだ頃に遡る。プラザホテルで Gatsby の夢が潰えた後、Tom が Daisy に Gatsby の車で彼と一緒に帰れと命ずるが、これはあり得ないのではないかと思った。Tom の目から見れば、この時の Gatsby は、手負猪同様、何をするか分からない危険な存在ではなかったのか。妻と Gatsby が二人で心中しても構わないというくらいの覚悟がないと、出来ないことではないか。しかし、ニューヨークに来る前に、わざわざ車を交換したのに、Daisy と Gatsby が彼の車で一緒に帰らないと、Tom の妻が Tom の愛人をひき殺すという見事なプロットが成立しないのである。構想したプロットを成立させるために、どこかに implausible なことが生じてしまう。私はフィッツジェラルド文学の致命的な問題だと思ふようになった。そのような読み方は、文学の読み方として根本的に間違っていると云われるかもしれない。フィッツジェラルド文学の愛好者の一人として、欠陥探しの様なことは気が進まないというのも事実である。長らく問題意識を持ちながら、論じることがなかった。本論とはテーマが違うので、これ以上述べないが、一度は論じなければと思っている。

は意味が分からなかった。¹⁶⁾しかし、言葉そのものではなく、声音の中に万事休すを予感したのである。彼の予感は正しかった。自殺後に（但し、彼の自殺に誰もまだ気づいていない）、Eddington と Sarah の会話の中で、経営陣は彼女の解雇が不適正に行われたことを最近発見し、Butler を解雇することが明らかにされる。そのさなか、警官と野次馬が雪崩れ込み、二人が突然の混乱に襲われるところで、ストーリーは突如として終わる。フィッツジェラルドのストーリーの中で、終わり方が非常に鮮やかな作品である。

次に“A Change of Class”について論じたい。この作品においてフィッツジェラルドは、未曾有の好景気と大恐慌がアメリカ人の生活・価値観をどのように変え、或いは変えられなかったか、アメリカ社会の価値観や信条にどのような変化をもたらしたか、そういった本質的な問題に最も肉薄したが故に、大恐慌を扱うフィッツジェラルド作品の中で最重要に位置する作品と思われる。

主要人物の一人 Earl Johnson は Jadwin Hotel 内の理髪店で働く腕の立つ理髪師である。¹⁷⁾まじめに働き続けていくらかの貯えができた時に自分の店を持つことを夢見る。いい物件を見つけたが、金が少し足りない。彼の顧客の一人は大企業 Hert-win のオーナー一家の御曹司 Philip Jadwin。Jadwin から内部情報を貰った Earl は Hert-win 株のインサイダー取引で大儲けをし、店は購入せず、株取引に目を奪われ、理髪業をやめてしまう。¹⁸⁾ Earl は幸せになったか。富裕になり、社会的地位も上昇

16) “Mrs. Summer’s left...”を Eddington は、退職したという意味で言ったが、Butler は死んだという意味に取った。

17) フィッツジェラルドの認識では、理髪師 (barber) は上流階級に差別される職業であった。“Dice, Brass Knuckles & Guitar” (1923 年) という作品の中で、主人公 Jim Powell の想い人 Amanthis が、「自分の求婚者は隣村の有望な若い理髪師」と言ったところ、Jim は非難して、“Your daddy oughtn’t to let you go with a country barber” (*The Price Was High*, 51) と答えたのは、その一つの証左である。

18) 米国内でのインサイダー取引については、1909 年に詐欺に相当し禁止という原則が連邦最高裁で示された。しかし、インサイダー取引の定義を含め法的に厳格に規制されるのは、1934 年の証券取引法の成立以降である。インサイダー取引の厳格な刑罰が法制化されるの

したと思った Earl は、上流階級との関係を築こうとするが、現実には出来ない。Earl が招待されるパーティーは、ホストは密造酒業者 (bootlegger) で他のゲストは ブロークンイングリッシュを話すイタリア人。もっとまじな人たちと交流できないのかと、夫婦げんかになる。パーティーの後、近くの路上で Jadwin と偶然出会った Earl は彼を自邸に招こうとする。Earl はここで奇妙な言葉を使ってしまう。“I live over the way. The house with the col—columnade” (*The Price Was High*, 359)。colonnade を言い間違えたのである。自分の新しい所有物を自慢したくても語彙が追いつかないのである。金・財産は急に増やせても、語彙・教養を急に増大させることは出来ない。必ずどこかでぼろが出る。Earl 自身は気付かないが、彼が軽蔑するブロークンイングリッシュのイタリア人と五十歩百歩なのである。*The Great Gatsby* にも同様のことがあった。名家の出身で Oxford 大学卒と言う割には Gatsby の言葉使い、教養が変だと Nick は気付く。Chapter 4 における Gatsby の自己紹介を Nick が最後まで信じなかったとすれば、最大の理由は言葉であったろう。Oxford 大学で撮った写真やモンテネグロ王国からの勲章を取り出しても、それらの物証ですら、言葉のおかしさから生ずる疑念を払拭することは出

は 1984 年である。連邦最高裁により禁止判決が出ていたとはいえ、1920 年代において、インサイダー取引は事実上、野放し同然であった。“A Change of Class” の中で、Jadwin は Earl に懇願されて二度、インサイダー情報を伝えるが、家訓を破ったが故に倫理的に忸怩たるものを感じても、法的処罰を恐れたり、Earl に弱みを握られたという恐れなど全く感じなかったのは、こうした事情による。なお、1934 年の証券取引法の草案を作った証券取引委員会議長は Joseph Patrick Kennedy であった。1920 年代、株売買と密造酒事業で巨万の富を作った人物であり、後の大統領 JFK の父親である。Joseph Kennedy は 20 年代に株売買で、ありとあらゆる裏ワザを使って大儲けしたと言われている。1934 年、証券取引委員会議長になるや、自分の使った全ての裏ワザを禁止にした。Joseph Kennedy が密造酒事業をしていたことは当時も知られていた。彼が民主党に巨額の寄付をしていたことと、ローズベルトとは大統領になる前から非常に親しかったことは知られている。しかし、Al Capone も政治家に多額の賄賂を贈り、親しい政治家は何人もいた。1937 年、Joseph Kennedy がアイルランド系最初の駐英国アメリカ大使に任命された時、Capone は刑務所にいた。同じ穴のムジナでも、大物は栄光に浴し、小物はムショにぶち込まれるということだろうか。Joseph Kennedy と Capone の明暗を分けたものは何か。1920・30 年代のアメリカ社会・政治・経済・文化・価値観等全てに関わる問題という気がする。課題として受け止めている。

来ないのである。¹⁹⁾ 言葉が素性をあらわす。成金は成金としか付き合ってもらえない。富裕になった Earl が経験したアメリカ社会とはそういうものであった。“Not the most bored captive of society had any more sense of being in a cage than had Earl” (*The Price Was High*, 358) 「どんな囚人ですら、檻の中にいることをアールほど強く意識している者はいなかった」。

金だけでは解決できないアメリカ社会の上流と下流の断絶。²⁰⁾ ところが、20 世紀最初の 40 年間のアメリカの歴史で、この断絶が一時的に溶融・溶解したことが三度あった。一度目は第一次世界大戦 (the Great War)。二度目は経済繁栄の 20 年代。三度目が大恐慌 (the Great Depression) である。第一次大戦では *The Great Gatsby* がいい例である。Gatsby は軍服を着ていなければ Daisy に近づくことは出来なかった。国に命を献げるため戦地に行くという立場でなければ、口約束であったかもしれないが、密かな婚約もなかっただろう。階級の隔たりが大戦中に一時的に消滅した別の例が “The Last of the Belles” (1928 年 11 月執筆: *The Saturday Evening Post*, 2 March 1929) である。サザンベルの Ailie Calhoun は大戦中、下層階級の Earl Schoen と恋仲になるが、戦後になって、Earl が平服で訪れた途端、軍服の時の彼の魅力が消失し (*Taps at Reveille*. Ed. James L. W West III. Cambridge, p. 62)、関係を断ってしまうエピソードが織り込まれている。

右肩上がりの経済繁栄の時代には、どういう形で階級の隔たりが消失したか、その例が “A Change of Class” に示されているのだが、*The Great Gatsby* や “The Last of the Belles” におけるエピソードとはベクトルが逆になる。Philip Jadwin は自分の会社のタイピストに恋していた。はに

19) Gatsby の言葉使いのおかしさに Tom も気付いていた。しかし、Daisy に気付いた様子はない。これは私には不思議であるが、本論では議論しない。

20) この断絶を解決するほぼ唯一の可能性は教育である。東部の一流大学に入学すること。フィッツジェラルドがプリンストンに強く憧れる背景の一つとして、それがあったと思う。

かみ屋だが、彼が気持ちを彼女に伝えられない一番の理由は身分差であった。もし自分が21か40ならば駆け落ちするという強い気持ちがある。しかし彼は今31、因習の中においてそんな自由はない。彼自身もまた、「檻の中にいたのである」(*The Price Was High*, 358)。ただ“miserable”(*The Price Was High*, 353)と内心思うだけで、何の行動も出来ないうちに、彼女が退社することになるが、Jadwinは退社する理由すら聞けない。聞けない理由は書いていない。社内慣行の様なものがあつたのかもしれないし、経営幹部が一女性従業員の退社の理由を直接聞くのは普通のことではなかったのかも知れない。²¹⁾しかし、一番聞きたいことを聞くことすら出来ないという不自由さこそ、彼が檻の中にいたことを象徴的に示すのであろう。しかし、経済繁栄の時代には彼を勇気づける変化があつた。経済的に成功した新興階級が出現して、上下の階級差を相対化し、階級間移動を促進したのである。この故にJadwinの従兄弟は秘書(stenographer)と結婚したが、家族・親戚から強い非難はされなかった。時代は階級差の相対化に向かって変わったのである。元理髪師Earlの経験は、時代の変化と逆行しているように見えるが、階級差の相対化に向かう時代の変化を嫌う上流層の抵抗が強いから生ずる現象であつて、矛盾ではない。*The Great Gatsby*におけるTomが新興階級に極端な嫌悪を示す場面を思い浮かべれば、一方で、Jadwinの従兄弟が下層の女性と結婚するのに、Earlのような成金が上流階層に受け入れられない、一見矛盾した現象が20年代に生じたことは不思議ではない。

勇気づけられたJadwinは偶然、元タイプスIreneと再会するが、彼女は既に結婚しており、babyもいた。Jadwinは、もし彼女が暮らしに困っているようなら助けようと思い、その晩、彼女の家の方にこっそり様子を見に行く。その時に起きた偶然が前記したEarlとの再会である。Earlが招待されたパーティーはIreneの家で開かれており、ホストは彼女の夫

21) タイピストの名前は、この後彼女が結婚するまで明らかにされない。彼女が退社した理由が結婚であるかどうかは明らかではない。

Howard Shalder すなわち密造酒業者である。かつて、Earl に Jadwin は自分の会社の内部情報を教え、大儲けさせたが、Earl は同じ情報を Shalder に伝え、儲けた Shalder は手広く密造酒業を営んで更に儲けながら、Irene を裏切り、Earl の妻 Violet と出来ている。Irene の苦境を知った Jadwin は、元はと言えば自分が Earl に内部情報を教えたことにあると、深い悔悟の念と責任感を抱き、何とか Irene を苦境から救い出したいと強く思う。²²⁾

大恐慌勃発。Earl は財産をほぼ全部失い、Shalder はギャングに脅かされる身である。Jadwin には殆ど経済的に影響がないように見える。²³⁾しかし、大恐慌は彼の意識を更に変えた。Irene を救いたいとただ思うだけでなく、行動に出る。人が良いお坊ちゃん、うじうじして勇気の無い男に見えた Jadwin が、上流階級という観念の檻から解放されて、積極果敢な行動者に実際に変わるの、20 年代のブームと大恐慌という二つの大変動を経てのことだったのである。

Earl は最後に残った 2000 ドルを資金に、Herzog ビル内の新しい理髪店の営業権を買い取って理髪業を再開するために既に内金 200 ドルを支払い済みであると、妻 Violet に話すが、まとまった金がまだ残っていたことを知った Violet は、ギャングに退去を迫られている Shalder と連絡を取り、その金を二人の逃走資金にすることを計画する。Herzog ビルのオーナーは Jadwin であり、Earl は Jadwin の了承を得るために、同ビル内の彼のオフィスを訪れるが、Earl の顔をもう見たくもない Jadwin は内金を全額返すから、理髪店をあきらめるよう持ち掛ける。しかし、自分が唯一出来る理髪師として出直したいという Earl に理のあることを認め、Jadwin は契約を決意する。銀行に連絡し、口座に残金 2000 ドルのある

22) 事の発端は Jadwin が Earl に内部情報を教えたことにあるが、そのことと Irene の苦境とは何の論理的関係もない。しかし、論理的関係はなくても、愛する女性の苦境に対し倫理的責任を感じることは不自然では全くない。

23) Jadwin の会社は影響を受けたように書かれているので、Jadwin 自身にも影響が及ばなかったはずはないが、テキストでは彼個人が影響を受けたようには書かれていない。

ことを確かめたのち、Earlの2000ドルの小切手と引き換えにJadwinが契約書に署名する直前、銀行から電話が入り、残金確認をしたばかりの共同口座から2000ドル引き出すための小切手が今持ち込まれ、署名者は共同口座名義人の一人Violet Johnson、支払先はHoward Shalder、支払って差し支えないかという確認を求めている。²⁴⁾ Ireneから夫Shalderの逃走予定について既に聞かされていたJadwinはしばし考える。もし自分が承諾すれば、Earlは妻を失うが、IreneはShalderから解放される。Jadwinは決断し、現金化を承諾する。Earlの口座残金はほぼゼロになる。理髪店営業の契約はどうなるのか。JadwinはEarlに向き直り、小切手に2000ドルと書き、署名するよう指示する。Jadwinは決断の時、一つだけ心に懸かっていたことがあった。妻をほかの男に奪われるEarlの気持ちはどうなのか、それだけが読めていなかったからである。妻の不倫を

24) 銀行からのこの電話は、事実上、口座名義人が署名した小切手（残金内の金額）の現金化の承諾をJadwinに求めている。銀行業務に関する技術的なことを私は知らないが、Jadwinが何者であれ、他者の所有権の行使を侵害する権利があるのか、疑問を持っている。もし、Jadwinにその権利がないのであれば、このストーリーは成立しない。

別の考え方もありうる。銀行にしてみれば、2000ドルの小切手による支払を伴う契約を結ぶため、残金確認を求めたのはJadwinが先。残金ありと答えた銀行は、実質上、その契約を結んで差し支えないと返事したことになる。ところが、その直後に同じ口座から2000ドル引き出すための有効な小切手が銀行に直接持ち込まれた。窓口へ直接来たほうと電話と、どちらを優先するのか。このような場合、裁量権は銀行にあるはずで、銀行にとって重要な客には間違っても不利にならないように対応する。そのような銀行の性格を考えると、大企業オーナーのJadwinに承諾を求めたのはごく自然だと思う。この作品には別の点でどうかと思う所が二つある。一つは、Jadwinがある日の朝、Ireneに偶然会い、同じ日の晩にまた偶然、Earlに会うというはありえなくはないが、安直な設定だと思う。IreneがJadwinのオフィスに再雇用の相談に来た同日、数時間後に、Earlが契約の件で同じオフィスを訪れるのも同工異曲である。しかし、フィッツジェラルドはこの種の手をよく使った。もう一つは、JadwinがEarlと契約する時に、小切手2000ドル分の預金がEarlの口座にあるかどうかを銀行に電話して確かめたことだ。非常に不自然な行動だと言わざるを得ない。JadwinはEarlと契約したくなかった。自分のかつての軽率な失敗を思い出させるEarlの顔を二度と見たくなかった。小切手が不渡りになり、契約破棄になったとしても、Jadwinは、ほっとすることはあっても、何の実害もない。彼にはEarlの預金残高を調べる動機は全くないのである。しかし、Jadwinが銀行に電話していなければ、その直後にEarlの妻が同額のの小切手を持ち込むことから生ずる終局の緊白のドラマが成立しないのである。*The Great Gatsby*におけるプラザホテルの対決場面の最後、Tomの言動は非常に不自然と前述したが、全く同質の不自然さがある。Jadwinが銀行に電話するのは、彼個人の動機によるのではなく、プロット上の必要性から生ずる行動なのである。

知っていても、夫が妻のことをもう愛していないかどうかは分からなかった。しかし、二者択一の決断を迫られた時、自分にとって大切な方を選ぶ、それしかないというのがフィッツジェラルドのメッセージだと思う。そういうぎりぎりの判断を迫られた時、道徳的にどちらが正しいかという基準は無意味なのである。たとえ、Earl にとっては許し難いことをしたことになるとしても、Irene の解放を選ぶしか Jadwin にはないのである。Jadwin は最後に Earl に尋ねる。ある男があなたの妻と駆け落ちして、今、駅に向かって逃げているとしたら、どうするか。“Mr. Jadwin, I'd thank God,” (*The Price Was High*, 368) と Earl は答えた。Earl が帰った後、彼が署名した 2000 ドルの小切手を Jadwin は破り裂く。見事な幕切れである。株式相場が上がり続けた 20 年代の好況期と大恐慌を経て、人々の意識が変わり、その変化は上流階級にも下層階級にもあらわれた。そうした経済変動期の社会の様相を、二人の人物を中心に人間の意識と行動の変容を表現した佳作と評する所以である。

Bibliography

Primary Sources

- Bruccoli, Matthew J., ed. *As Ever, Scott Fitz--: Letters between F. Scott Fitzgerald and His Literary Agent, Harold Ober--1919-1940*. Philadelphia: J. B. Lippincott, 1972.
- Fitzgerald, F. Scott. *F. Scott Fitzgerald's Ledger (A Facsimile)*, ed. Matthew J. Bruccoli. Washington: Bruccoli Clark/NCR, 1973.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Price Was High: The Last Uncollected Stories of F. Scott Fitzgerald*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1979.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: A New Collection*. Ed. Matthew J. Bruccoli. New York: Charles Scribner's, 1989.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. Ed. Matthew J. Bruccoli. Cambridge: Cambridge University Press, 1993.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Lost Decade*. Ed. James L. West III. Cambridge: Cambridge University Press, 2008.

Fitzgerald, F. Scott. *Taps At Reveille*. Ed. James L. W. West III. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.

Fitzgerald, F. Scott. "On Your Own," *Esquire*, 91 (30 January 1979), 56–67.

Secondary Sources

Brucoli, Matthew J. *F. Scott Fitzgerald: A Descriptive Bibliography*, revised edition. Pittsburgh, Pa.: University of Pittsburgh Press, 1987.

Brucoli, Matthew J. *Some Sort of Epic Grandeur: The Life of F. Scott Fitzgerald*. Second revised edition, Columbia: University of South Carolina Press, 2002.

Mangum, Bryant. ed. *F. Scott Fitzgerald in Context*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013.